
すわろっている

甘楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すわるうている

【Nコード】

N7320K

【作者名】

甘楽

【あらすじ】

とある『語り屋』があなたに語るのは、はるか昔の運命の物語。

主人公のハルは街で人気の美青年召喚獣使い。ある新月の夜、彼は禁忌を犯して召喚獣を召喚するのだが……それは、運命の物語の始まりに過ぎなかった。運命によって引き合わされた一匹のアゲハ蝶の召喚獣とハル。一人と一匹の運命の物語の行方は？

今日は。

私の四つ目の連載作品「すわろうている」を開いていただき、誠にありがとうございます。

この作品は主にファンタジーですが、後半からは恋愛も混ぜようと思います。私は恋愛作品というのは超苦手なので、ベタな展開とか何だこれみたいな話になるかもしれませんが、どうか温かい目で見てください。

では「すわろうている」開幕です！

ねえねえ、そのあなた。

そう。あなたのことよ。一つ、お話を聞いてくださらない？

え？ いくらするのですかって？

あはは。大丈夫よ。こちらは旅をしながら、無償でたくさんの人に
お話をしているの。

……だ、大丈夫よ。怪しい者じゃありませんから。

だから、そんな訝しそうな目でみないでね。

えっと、気を取り直して。

私のような者のことを世間では『語り屋』と呼んでいるわ。

……え？ あなた、語り屋を知らないの？ それ、本当？

……そう。じゃあ、語り屋の説明から始めるわね。

語り屋は、様々な国を旅しながら話を語る、言わば吟遊詩人のよ
うな者たちのことよ。

その話は自分の体験談であったり、様々な国の神話であったり、他
の語り屋から聞いた話であったり、
自分の作り話であったり、自分の国にある自分の好きな物語であつ
たりするわ。

語り屋たちは世界中の数多の物語を人々に語り継ぐために、
人々に知ってもらうために、思いを込めて話を語るの。

そうして人々の心に根強く残った物語は、何百、何千年という時を
越えて人々に語り継がれていくわ。

さて、語り屋の説明はこれくらいにして。

私が怪しい者ではないと分かってくれたようだから、本題に入るわ
よ。

時間は、ある？ ……そう。良かった。では

今からお話するのは、語り屋が語っている物語の中で、最も古く
から語られている話よ。

もう数千年も前　　正確には五千二百七十三年も前のお話。まだ魔術や召喚獣というもので溢れていた、魔術時代のことよ。知ってる？　魔術や召喚獣って。

……　ああ。やっぱり召喚獣が分からないわよね。

召喚獣っていうのは、召喚獣使いに召喚され自分を召喚した人間を主人としてお守りする生き物のことよ。

……　ちよっと、話がややこしいわね。

まあ。詳しいことは話しながら説明できるから、今はいいわ。

前ふりが長くなったけど、ここからが本文よ。

　　今から五千二百七十三年。とある国のとある村に、一人の美青年がいた。その青年は、召喚獣使いだったんだけど……

　　召喚獣使い、最大の禁忌をおかしてしまったの。

思ったのですが、ライトノベルのサービスシーンって、十五禁とかになったりしませんよね？ そんなあまり行き過ぎたものでもありませんし……。ラノベにはつきものだと思うので、別に、構いませんよね……？

Episode - 1 運命の出会いから始まる物語(前書き)

更新遅くて本当に申し訳ございませんッ!!

Episode - 1 運命の出会いから始まる物語

これからお話しするのは、壮大なる運命の物語

運命とは、神のちよつとした悪戯心から生み出されるもの。神は『運命』という名の糸を己の作り出した生き物たちの手足に結び、玩具を作り出す。生き物たちは天上に君臨する神に翻弄されながら、笑い、愛し、喜び、悲しみ、怒り、苦しみ、誰もが大切な人の、そして自分の幸せを願いながら、その生をまっとうする。時には享樂に酔い、時には愛することの苦しさに戸惑い、時には深い悲哀に溺れ、時には涙を流すことの大切さを学び、時には醜悪な行為に憤り、時には守ることの難しさを知りながら。

神が操る糸は生き物たちの手枷、足枷となつて自由を奪う。生き物たちは運命などに翻弄されてなるものかと、不様に抗う。糸から逃れるために僅かばかりの抵抗を見せる地を這うものたちを眺めながら、神は残酷にも手を差し伸べせず、氷のように冷やかな嘲笑を浮かべる。

生き物たちは抗うことなどできず、それぞれ神の定めによる必然の人生を送る。

時に運命の巡り合わせに、感謝をしながら。

時に運命の巡り合わせに、絶望しながら。

x x x

漆黒の闇が、世界中のすべてを己の色に染め上げる夜。真つ暗な闇はすべてを覆い隠す。

今宵は新月。ほの明るい月の光さえ闇を突き抜けはしない。

「……太古より人間に使えし獣よ。我、汝との契りを交わす者なり

……」

黒一色の深い闇に包まれた、とある一件の家の個室。そこに、呪

文の様な言葉を低い声音で唱え続ける一人の青年があつた。

青年は、この夜闇に劣らぬほど濃い漆黒の髪と瞳を持ち、その色に合わせているかのような同色のロングコートを纏っていた。

白いシーツの敷かれた木枠のベッドや、滑らかな木目が流れる木造りのタンスや、古めかしく黄ばみ埃を纏うかのように積もらせている本がぎつしりと詰まった本棚などが置かれた、小さな部屋。そこに、青年は立っている。

青年が立つ少し前 部屋の中心 の床には、一本の蠟燭が置かれていた。蠟燭には、ゆらゆらと不安定に揺らめく紅蓮の炎が灯っている。その炎の光は前方から青年を不気味に照らし、その背後の壁に大きな影を映し出す。

蠟の溜まりを床に作り上げている白い蠟燭を取り囲むようにして、床には大きな魔方陣が描かれていた。しかも炎に照らされた複雑な形の魔方陣は、赤黒い。暗闇の中のため、ほぼ黒にしか見えはしないが。……どうやらそれは、血で描かれたものらしい。現に、魔方陣の手前に佇む青年の右手人差し指には、目に映える白色をした包帯が器用に巻きつけられていた。

「……漆黒の闇よりもなお黒き羽を持つものよ。今、ここに姿を現したまえ……」

青年は虚ろに呟くと、女性のもののように長細く色白の綺麗な左手を持ち上げ、右手人差し指に巻かれた包帯の上にかざした。そのままやや緩慢な動きで、暗闇に浮かびあがって見えるような純白の包帯を解いていく。その手は、ひどく震えていた。よく見ると、包帯を解く手元に視線を落としている青年の顔も僅かに強張っている。「……我の血と契約したまえ。我、汝に自由を与え、汝、我に強固な守りを与えよ……」

青年の手から逃れるようにして包帯が解け、蛇のように緩やかな曲線を描きながら床へと落下する。包帯が解かれた青年の人差し指そこには、ほんの小さな切り傷が付いていた。

「……我の血を受け入れよ。さらば契約は成り立たん」

青年はふつと言葉を止め、乾いた唇を舌でゆつくりと湿らせた。

その舌が唇全体を湿らせるより早く、その左手がコートの下の右腰へおもむろに伸びていた。青年の左手がコートの下へ隠れ、次の瞬間その手には鞘の付いていない小ぶりなナイフの柄が握られていた。それは柄に美しい彫刻がほどこされた、大変高価そうな代物だった。鋭く研がれた白刃は、蠟燭の炎に鈍く反射する。

青年はナイフの柄を、汗ばんだ手の平でぎゅっと握りしめる。小刻みに震える手はやや緩慢とも思える動きで、鋭いナイフの刃を右手の人差し指にそつと添えた。

「……………」
青年は薄く開けた唇の隙間から、小さく息を飲み込んだ。こくり、と喉がわずかに上下する。額から流れ落ちた汗のしずくが、ゆつくりと頬を伝う。

ナイフの刃は青年の指の上で、白く滑らかな肌から真紅の血が流れ出るときを待ち望んでいるかのように、恍惚とも思える閃きを見せる。

「 汝。主の血の情報を、受け取りたまえ」

青年は僅かに目を瞑り、ナイフを持つ手に僅かな力を入れた。刹那、力が伝わったナイフの刃が指を切りつけ、白い肌に不気味なほど映える赤が生まれた。

「……………」
荒い呼吸を繰り返しながら、青年は恐る恐る瞼を上げた。その漆黒の瞳が自分の指の上でおぞましく輝く血を確認するや否や、僅かに血を付けたナイフが指から離れた。

男性にしては細い指の上で、真っ赤な豆のように血が盛り上がる。それは今にもボタボタと落ち、床に赤黒い染みを作りだしそうだった。

「 いでよ。我が僕^{入せし}」

青年は右手を真つすぐ前方に突き出し、魔方陣の中心で輝く蠟燭の上まで持ってきた。指の位置は、蠟燭の真上より僅かにずれてい

る。青年はゆっくりと深呼吸をすると、右手の人差し指をゆっくりと傾けた。指の上で、盛り上がった真つ赤な血が揺れる。やがて半円をした血の形が崩れ、つうつと指を伝い、血は蝋燭よりややずれた床へと真つ逆さまに落ちていった。

蝋燭よりやや青年よりの床に血は跡をつける。青年はそのまま、蝋燭を中心に指を回転させる。指からこぼれ落ちる血は蝋燭を囲むように、丸い跡をつけていく。

やがて血の跡は蝋燭を完全に囲み、青年は手を引いた。

静寂と沈黙。息苦しい部屋の空気。

煙の臭いが立ちこめる中、ふいに何処からともなく生ぬるい風が吹き、どろりと青年を包み込んだ。

「来る」

青年の言葉とともに、炎が不気味に揺らめきながらかき消えた。

とたんに、墨を流し込んだかのような闇に部屋が覆われる。

青年の額と頬に冷や汗が走る。生ぬるい風は、僅かに強さを増す。風によつて小さく軽い物が揺れ、低い音が立つ。

風は唸りを上げながら、徐々に強さを増してゆく。

「……くっ」

青年は風に乱れてうるさく音を立てるコートを手で抑え、顔を歪めた。その足が、僅かに後退する。

風は人が立つことで精一杯になるほど、その勢力を増していた。

荒れ狂う風は部屋を様々な音で満たす。何かと何かがぶつかり合う鈍い音、ガラスの瓶が落ちて床で割れる派手な音、タンスや棚が揺れる低い音。

「……くそっ。おかしいっ……。この風は、異常だ……！」

E p i s o d e 0 - 2 運命の出会いから始まる物語(前書き)

一か月周期の更新で本当に申し訳ないです；
これからは文章の量は短くなると思いますが、できるかぎりこまめに投稿したいと思います。

Episode 0 - 2 運命の出会いから始まる物語

青年は、正面から容赦なく吹きつけてくる風を少しでも防ごうとコートコートの襟を立て、顔の下半分を覆った。青年の額には焦りからかじっとりじっとりと絡みつく脂汗が滲しみんでいる。

異常な勢力を持つ風は顔を歪める青年をもてあそぶかのように、どンドンとその風力を増していく。

青年の足は強風に押されて少しずつ、しかし確実に後退していく。青年は眉間に深い皺を刻み、歯をくいしばり、風に負けまいと足を踏ん張る。が、

「うわッ！」

巨大な手の平に、思い切り胸を突き飛ばされたかのような感覚。計り知れない衝撃に襲われた青年は、まるで体重がないかのように軽々と後方へ飛ばされ、木の板でできた壁に背中と後頭部を強かに打ちつけた。

「っ痛う……」

青年はうずくまり、痛む後頭部を両手でおさえる。意識は不安定に揺らめき、咳が喉の奥からこみ上げてくる。青年は歯を食いしばって痛みと咳に耐え、床に手をつけると壁にもたれたままゆっくりと立ち上がった。

「うっ……。え？ あ、れ……？ 風、が……」

痛みに歪んでいた青年の顔が、ふいに戸惑いの色一色に染まる。

青年を吹き飛ばすほどの強い風が、先ほどまで吹き荒れていたことは嘘であるかのようにぴたりと静まっていたのだ。

夜闇に少し慣れた目を凝らし、青年は魔法陣が描かれているあたりを見回す。薄暗いため、ぼんやりとしてよく分からない視界の中

青年の黒い瞳が、あるものを捉えた。

それは 人の形をした、？何か？。

闇の中のため朧な線で見えないが、それには顔らしき丸いも

のがあり、そこから細い首が伸び、続いてなだらかな斜面を描く肩があった。下部は闇にのまれていたために見えないが、ちゃんとした人間の形をしていることは明らかだ。

「……できた。ついに、オレは、召喚、できたんだ」

言葉の一つひとつを噛み締めるように口に持した青年の瞳に、微かな希望の光が宿る。見る者に鮮烈な印象を与えるその光を灯す瞳は、光輝を浮かべて綻ぶ。

青年は、まるで慎重に足を運ばなければ床が抜けてしまうとしてもいうように、恐る恐る足を一步前に踏み出す。立てつけの悪い扉の様な軋みを足元から上げつつ、前へ前へと一步一步床を踏みしめるように青年は人の形をしたもの　青年が召喚した召喚獣　のそばへと歩み寄る。召喚獣はまるで息づいていない置物のように、その場から一ミリたりとも動かない。まるで、青年をその場でじっと待っているかのように。

召喚獣のすぐ手前まであと一步。青年は震える手を召喚獣へと伸ばし、その身体に触れようとした。刹那、その頭に締め付けられるような鈍い痛みが襲いかかる。

「ぐっ　！」

青年は激しいその痛みで顔を歪め、がくんと膝から力が抜ける。慌てて踏みとどまろうと両足に力を込めるが、その努力も虚しくブーツに包まれた両足が絡み合った。そのまま青年の身体はぐらりと傾き、

「うわっ！」

すぐ傍で棒立ちになっていた召喚獣の身体にぶつかつた。召喚獣は倒れこんできた青年を支えるかと思いきや、何の抵抗もなく己の身体も後方へ倒し、床を軋ませ派手な音を立てながら一緒に床へと身体を打ち付けた。

Episode - 3 運命の出会いから始まる物語(前書き)

これからは、砂漠の薔薇をお休みさせていただき、こちらを重点的に投稿させていただきます。

Episode 0 - 3 運命の出会いから始まる物語

「……っ……っ……」

召喚獣が受け止めてくれるだろうとすっかり思いこんでいた青年は、受け身も取れぬまま床に身体を打ち付けた。幸い、召喚獣が下敷きになっていたため青年にさほど痛みは走らなかつた。

「……っ、あ、えっと、大丈夫か？」

青年は召喚獣へ向けて、身体を起こしながら声をかける。

「……っ……」

しかし青年の下敷きとなつている召喚獣は、返事はおろか身動き一つ取らない。思い起こせば、召喚獣は倒れた時さえ悲鳴一つ上げなかつた。痛みは青年よりもひどいであろうというのに、まるで口がないかのように一言も声を発しないのだ。

「……？」

まるで生きていないかのように何もしない召喚獣を訝しく思いながらも、青年は両手を床につけて身体を支えながら、ふらりと上半身を起こす。右手は固く冷たい木の床につき、左手の平は何かむりゆりとした柔らかい感触を捉えた。

「……何っ？」

それが何なのか分からず、青年は眉をひそめる。左手の平には、柔らかさとともに生きている者独特の温かさも感じられた。明らかに、右手に感じる床の感触とは違う。

「あの……」

「……あの、大丈夫??」

そう問おうとした青年の言葉は、

「五月蠅いな！ 一体何が起きたんだ!？」

床を鋭く軋ませながら、青年の部屋に騒々しく入って来た人物によつて遮られた。

大きく開け放たれた青年の部屋の入口の木戸から、淡い橙色の光

が流れ込む。

「　　っっ」

騒がしい音がした方向を反射的に振り返った青年の闇に慣れた目を、強烈な橙色のランプの光が射る。

蝋燭の光に顔の右半分を照らされてランプを片手に部屋の入口に立っていたのは、若い女性だった。青年よりはやや年上に見える。色白の肌に映える漆黒の長い髪と同色の瞳が青年とお揃いの、強そうないメージを受ける美しい女性だった。

女性は部屋の中で倒れている青年と、青年の下敷きになっている召喚獣をランプの光で照らし出し、その姿を漆黒の瞳で認めるなり、
「はああああああああああああ　　!?」

眼球が落ちてしまうのではないかと心配になるほど双眸を見開き、家を揺るがすような大音量の悲鳴を上げた。

「　　いいいいっ!」

青年の鼓膜に、爆音の悲鳴が直撃する。青年は思わず入口の方向を向いている右耳を右手で押さえ、両目を固く閉じる。

女性の悲鳴はすぐに収まり、青年はその悲鳴の意味を考えるより早く、安堵の息をつきながら右耳から手を離し両目を静かに開いた。
刹那、

漆黒の瞳に、鮮やかな色が飛び込んできた。

瞳がまず捉えたのは、青年の左手だった。左手は無論、床にはつけられていない。その手の下に見えるのは、滑らかな白い肌。

「　　はっ?」

青年は恐る恐る視線を、自分の左手から上へと移動させる。白い肌の上には覆うにして、透き通った蒼い髪の毛がかかっていた。

青年の瞳はランプの光に白く輝く肌を捉え、くつきりと浮き出た鎖骨を認め、すらりと細く伸びる首の上を通過し、ふっくらとして艶やかな赤い唇をやや目を見開いて見、高めの鼻を一瞥し

底なしの闇のように深い、吸い込まれそうなほど大きな漆黒の瞳を見つめた。

「……………」
沈黙。

「
」
微笑。

青年の下敷きになっていた召喚獣は 少女の姿をした全裸の美しい召喚獣はふつくらした唇をとても嬉しそうに綻ばせ、青年に向けて微笑んだ。

「……………あ。あ、ああ。どわあああああああああああ
！！」

全裸美少女を押し倒し、少女の左胸の膨らみの上に手の平を置いた形になっている青年は、空気を揺るがしガラスを振動させるほど壮絶な叫び声を上げた。

月の光さえ届かぬ新月の夜。一人の青年と、一匹の美少女召喚獣はこうして？運命の出会い？を果たしたのだった。

Episode 1 - 1 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動(前書き)

誤字脱字指摘、感想、批評、何でもお待ちしております。

Episode 1 - 1 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動

柔らかく抱擁するように白い、春の朝日。極彩色に彩られた景色は、見る者を圧倒するほど美しい。景勝を望む人々は、あまりの美麗さに息をのみ目を^{みは}瞪る。春独特の暖かな風は穏やかに草木を揺らし、花の芳しい香りを人々へ届ける。

「……………ん。ぐあああぁっ」

昨夜、騒動を起こした張本人である青年は、ある程度片付けられた自室のベッドの上で唸るような声を上げつつ、両手両足を目一杯伸ばして大きく身体を広げた。ベッドに敷かれた純白のシーツは、ガラス窓越しに降り注ぐ光に照らされてより一層その白さを増している。

「……………」

仰向けに寝転んでいる青年は、寝起きのかすむ視界の中で天窓つきの高い天井をぼんやりと見つめる。天窓からは目にしみる蒼さを放つ空が、鮮やかに覗いていた。

「おはようございます、ご主人様。昨夜はよく眠ることができましたか？」

ふいに響いた、柔らかく澄んでいて僅かに幼さを残した声。青年は入口の方向から唐突に上がったその声に、はっと目を見開く。かすんでいた景色も、今でははっきりと認識できる。

青年は緩慢な動きでゆるりと瞼を下ろすと、腹筋に力を込めて上半身をベッドの上を起こした。耳障りな音を立てながら、ベッドのスプリングが悲鳴を上げる。夜中に青年が蹴っていたのだらう。足元で半分落ちかけ状態の白い塊となっていた薄い掛け布団が、ベッドの揺れに耐えきれずに軽い音を立てながら床へと落下した。

青年はふわりと軽く瞼を上げる。男にしては長いまつ毛が僅かに震え、美しく澄んだ黒眼が姿を現す。

青年はそのままベッドから降りようとはせず、顔だけを声の上

った入口へと向けた。開け放たれ、後方の窓から降り注ぐ白い光に包まれてそこに立っていたのは、

「ご主人様、お姉さまのユイ様が今すぐ起きるようにと言っております」

案の定、にこりと微笑みながら青年を見つめていたのは、昨夜青年が召喚してしまつた蒼い髪と黒い瞳を持った美少女の召喚獣だった。今日は白い肌を露出してはならず、寝巻に見える質素な白いシヤツと七分丈のズボンをはいていた。腰にとどきそうなほど長いウエーブのかかった蒼色の髪は、まとめずにそのままおろされている。青年は大きなため息をつく、細かい埃を舞わせながらベッドへと再度倒れた。

「どうされましたか？ ご主人様。二度寝はダメですよ」

青年は朝日の中で綺麗だと思えるほど煌めく埃を忌々しげに目で追いながら、苛立つたような声音で返す。

「これは二度寝じゃない。現実逃避だ！ くそっ……。昨日のことは夢であつてほしかった。って、ああ？」

青年は先ほど上半身を起こしたときよりも素早く身を起こし、身体を反転させて両手をベッドの上につけ、食い入るように身体の下の白いそれを見つめた。黒い瞳がベッドを穴があきそうなほど見つめた後、

「オレ、どうやってベッドで寝たんだっけ……？」

酔つ払いの科白のような言葉を、ポツリともらした。

青年の訝しげな声に、少女の即答が返つて来る。

「ご主人様は気絶なされたのですよ。それを、私がベッドまで運ばせていただきました」

「は、あ……」

少女の言葉によつて、青年の脳内に昨夜の出来事が走馬灯のように駆け巡りかけた。その思いをかき消すように、青年は慌てて首を横に激しく振る。

「ご主人様、ユイ様がお待ちです。早く起きてください」

「……イヤだ。ヤダヤダ、絶対にヤダ。今日は一日中寝てたいんだ！」

八つ当たりをするかのようにベッドを両手で殴り、駄々っ子のよ
うな言葉を吐く青年に対し、少女は困ったような笑みを浮かべる。

「聞き分けのないことをおっしゃらないでください。ご主人様」

「大体！」

青年はふいに両手を止めると、噛みつくような勢いで入口に立つ
少女を振り返った。召喚獣の少女は、苦笑から一変してきよとんと
した顔で青年を見つめる。

「その？ご主人様？って呼び方は何だよ？ 普通、召喚獣は自分の
主人のことを？主様？と呼ぶものだろう？」

青年は突き刺すようにして、勢いよく少女を右手の人差し指でさ
す。少女は「ああ」と言ってから笑顔全開で青年を見つめる。

「それは、ユイ様の召喚獣であられる火影様ほかげがご主人様と呼んだ方
が、主あはお喜びになるだろうと申しておりますもので……」

「火影ええ……。くそっ……。後で十発くらいぶん殴ってやる……
！」

青年は熱い炎のように瞳をぎらつかせ、低く唸った。

Episode 1 - 1 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（後書き）

まだまだ波に乗っていませんが、頑張りたいと思います！

Episode 1 - 2 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動(前書き)

自主規制注意 W W

Episode 1 - 2 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動

そんな青年の態度や感情変化などお構いなしに、少女は笑顔のまま続ける。

「では、ご主人様。さっそくユイ様のもとへ参りましょう。ユイ様はただ今、リビングで食事の準備をされています」

「ああ。そうですね……って、オレがそんな簡単に従うと思うなよ！今は……ダメだ。無理。無理。無理。無理。今姉貴に会えば、オレはもう起きたくても起きられない永遠の眠りにつくから」

青年は恐ろしげに身を震わせ、自分の身体を抱きしめるように身体の前で両腕を交差させた。

「……そうですね。しかしユイ様曰く？もし行きたくないなどと言えば、部屋に押しかけて手前の【自主規制】を【自主規制】とともに【自主規制】で【自主規制】な【自主規制】にして、さらに【自主規制】は【自主規制】の【自主規制】が【自主規制】だから！覚悟しておけ、このクソ馬鹿弟！？だそうですが、どういたしますか？」

可憐に微笑み続けている美少女召喚獣の口から大変品のない言葉が飛び出し、その顔と言葉のちぐはぐさに青年は啞然として口をポカンと開けていた。

何を勘違いしたのか、沈黙を了解と捉えたらしい少女はさらに笑みを顔いっぱいに広げて悪魔の様な言葉をはく。

「分かりました。ご主人様はリビングへ行きたくないと言っていると、私からユイ様へお伝えしておきます」

「だあああああああッ！分かった！行く。行きますって！」

召喚獣の言葉ではっと我に返り、血相を変えて必死に返答の言葉を紡いだ。青年の言葉に、少女は笑みを浮かべたまま頷く。

「そう、ですか。ところで【自主規制】や【自主規制】などは、一

体どういう意味なのですか？ ご主人様の意見を覆すほど、それはすごいものなのでしょうか？」

「え？ えええ……」

青年はニコニコと笑い続ける少女に対して、額から冷や汗を流した。僅かに顔を引きつらせている青年を見、少女はきょとんと小首をかしげる。

「……ご主人様？」

「はっ！？ え、あ……。そこ、オレに説明させないでください……」

青年はげんなりと顔を俯かせ、「そうですか……」と訝しそうな表情をした少女が答える。

「では。私は先にリビングへ行かせていただきます」

「ああ。分かった……」

すつかり姉の言葉に老けこんでしまった青年は視線を上げないまま、ボソリと言葉を落とす。青年の返答を確認した少女はひらりと身をひるがえし、入口の木戸を後ろ手に閉めながら廊下へと出て行った。

Episode 1 - 2 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（後書き）

今回短くて申し訳ないですorz

切りの良いところで終わりたいかつたもので……。

さらにピ　とかバキューンとか五月蠅くてごめんなさいww

清々しい日光が窓越しに降り注ぐ、清潔なリビング。

パンの焼ける香ばしい匂いが、リビングを満たす。木の壁際には食器棚や香辛料などを入れたビンが並んでいる棚が、ずらりと並べられている。リビングの床にはベージュのカーペットが敷かれ、その上には重量感のあるずっしりとした木のテーブルが、四本の足で支えられていた。四角の形をしたテーブルの一つを除いた三辺には、それぞれ椅子が並べられている。キッチンと一体のあまり広いとは言えないリビングには、それ以外に家具らしいものはない。リビングの南側の壁には、玄関らしきガラス窓のついたドアが取り付けられていた。窓には薄いレースのカーテンがかかっているため、外はうかがうことができない。

穏やかな朝の風景。どこかで驚が、その軽やかな声でさえずる。

「……………」

縦に切り分けられ木の籠に入れられた食パンやバケット、小瓶に入った色とりどりのジャムやクリーム色の滑らかなバター、そして金色に艶めく蜂蜜などが置かれたテーブルを挟んで、立ったままの青年とテーブルに据え付けられた椅子に座る姉のユイは、口を固く引き結んでにらみ合っていた。正確に言うと、ユイが一方的に青年を睨んでいるだけで、青年はその視線を居心地悪そうに受け止めているだけなのだ。

黒曜石のような二対の瞳がぶつかり合う中、

「……………プツ。ギャハハハハッ！」

沈黙に耐えかねたようにしてふいに盛大な笑い声を上げ始めたのは、一匹の召喚獣だった。沈黙に支配されていたその空間にその笑い声は、やけに大きく響く。

ゲタゲタと下品に笑い続ける金色の目をした召喚獣に、青年は密やかなため息をもらす。

「火影^{ほかげ}。五月蠅い。もつと緊張感を持ってよ。それからついでに、十発くらい後で殴らせる」

「何だ。その話の突然切り替えは？」

すつと視線をユイから離し、火影というらしいニタニタと笑い続ける召喚獣を青年は睨みつけた。

「とりあえず黙れ。お前の笑い声は神経に触る」

「や、スマン。つい昨日のことを思い出しちまって。クククツ。あの時のお前さんは見物^{みもの}だったなあ。お前さんの部屋からデカい音が聞こえたものだから、驚いて見に行ってみればなんとビックリ！入り口前には主^{あるじ}が真つ蒼な顔して突っ立ってるし、部屋の中じゃお前さんがべっぴんさんを押して倒して馬乗りになっているじゃないか。あたいはもうビックリして、声も出なかったね」

「うっ、五月蠅い！ しかもあれは押し倒したんじゃねえよ！ オレがこの子の上に倒れて、それで……そういう風な形になったんだよ！」

恥ずかしげに顔を真っ赤にする青年を見つめ、クスクスといやらしく火影は笑い続ける。亜麻色のふんわりとしたフェミニンボブの髪は揺れる肩とともに小刻みに震え、髪の毛に呼応するようにして火影の尻尾がふわりと揺れた。

火影は、ユイの召喚獣である。金色をした長い耳とふさふさの九尾を持つ、善狐^{ぜんこ}の召喚獣だ。

「ハル。昨夜のことはいい。それよりも今は、この召喚獣の娘をどうするかが問題だ」

張りのある、ユイの低い声が響く。ハルというらしい青年は火影から視線を外し、俯きがちにユイへ視線を向ける。

「それは、自分でも十分分かってる。けど」

「召喚獣使いの禁忌、三つを上げる」

だしぬけに、ユイはハルに問うた。「は？」とハルは間の抜けたような声を上げて口を開く。

「姉貴？ 別にそんなこと言わなくても分かって」

「あたしは言えとっているんだ！ 口答えをする気か？」

ユイの拳が思い切りテーブルに叩きつけられ、テーブルが僅かに振動しながら鈍くも大きな音を立てる。

テーブルを挟んで火影と向かい合って座っているハルが昨夜召喚した召喚獣の少女は、ユイの激声にびくんと肩を震わせ双眸を見開く。少女の向かいでやれやれという風に首を横に振る火影は、小さく肩をすくめた。

テーブルに並べられたパンやジャムなどの小瓶は振動によって僅かに揺れ、それぞれ二人と一匹の前に置かれている紅茶の水面が揺れる。四つの中で最も激しく揺れたユイのカップに注がれた紅茶は、小さな波を作り上げテーブルの上へ僅かにこぼれた。

「……………。禁忌その一。召喚獣使いと召喚獣の間に恋愛感情があつてはならない。その二。その一を守るために 召喚獣使いは、異性の召喚獣を召喚してはならない。その三、召喚獣使い一人につき、三匹以上の召喚獣を召喚してはならない」

ハルは俯いたままぼそぼそと喋り、ユイはハルを男顔負けの勇ましく恐ろしい表情で睨みつける。

「分かっているのならば、何故お前は禁忌を犯した？ しかも、最大の禁忌と呼ばれる異性の召喚獣の召喚を」

ユイの厳しい声音に、ハルは力なく首を横に振り否定する。

「違う。犯すつもりは、なかったんだ」

「では何故、この娘はこうしてここにいるんだ？」

ユイはちらりと斜め左前に座る少女を一瞥し、再び穴が開いてしまつのではないかと心配になるほど、じっとハルを睨みつける。ハルはまるで自分の発言に自信がないかのような様子で、口を小さく開く。

「……………その。それはオレにも、よく分からないんだ」

「ふざけているのか？」

間髪入れず、ユイが問う。

「本当だって。 オレはこいつを召喚するつもりなんて……………禁忌

をおかすつもりなんて、更々なかつたんだ」

ハルは眉間に皺を作って顔を歪め、視線をだんだんと下へ下げながら言葉を弱々しく紡いだ。

ユイはハルの仕出かしてしまった事と、その態度に呆れるようにしてため息をつく。

重苦しい空気が清々しい朝の香りと光に包まれた部屋を満たす中、「運命、なのではないでしょうか？」

ふいに、緊迫した空気に似合わぬゆったりとした声が響いた。

Episode 1 - 4 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動

不自然なほど穏やかな声に、二人と一匹の視線が声の主へと集中する。

声の主 ハルの召喚獣である少女はにっこりと笑い、

「運命、なのではないでしょうか？」

再度同じことを先ほどよりやや緩やかに、言葉の一つひとつを噛み締めるように言った。

「運命……」「運命、か」「運命ねえ」

ハル、ユイ、火影がそれぞれ同じ単語を用いて、ひっそりと呟く。二人の一匹の反応を認めた後、少女はこくりと小さく頷く。

「はい。ご主人様の様子を見ますと、本当にご主人様は私を召喚するおつもりではなかったようです」

「ああ。勿論だ」

「では、運命というはたらきが私とご主人様の間に生じて、私はご主人様に引き寄せられたのではないのでしょうか？」

まるで絵空事としか思えない言葉を、少女は静かに、そして神妙に言った。

「ふふん。運命ねえ。そんな非現実的なものを信じるっていつのころよ？ お前サンは」

火影は少女の言葉を鼻で笑う。少女の視線が、火影の金の瞳へと注がれる。

「はい。私は信じています」

「……けっ。物好きなことで」

なおも真剣に言い続ける少女をあざ笑うように、火影は吐き捨てるような物言いをした。

「そうですね。すべては？神のみぞ知る？というところではないでしょうか？」

火影の態度に憤ったりはせず、少女はにっこりと微笑んでやんわ

りと言葉を口にした。その声の端には、何か意味深なものが感じられた。真摯な瞳で語る少女を、火影は奇妙な生命体を見るかのような眼差しで不躰に見回す。

「……運命か。あいにく、あたしは非現実的なものは信じない主義でな。幽霊、天使や悪魔、天国や地獄、神といったものも信じない愛情、友情といった類のことも信用はできんな。己の目で見ることができるもの、己の手で触りその存在を確かめることができるものしか、あたしは信じていない」

ユイは淡々と、冷静に言葉を紡いだ。

「そうですね。考えというのは、個々人で違うものですからね。自分の考えや趣味を、他人に押し付けるようなことをしてはいけませんしね」

少女はユイを見つめて微笑んだまま、存外にまともなことを言った。言葉を言いきった後、漆黒の瞳はユイから動き、ハルの方へと向けられる。

「……………」
ハルはその視線に気付かないまま、ぼんやりとテーブルの上に並ぶ朝食を眺めていた。少女の黒く煌めく瞳が、一瞬陰りを帯びその輝きを鈍くする。

静かな時が流れる。静寂に包まれた家の外では小鳥が何かを歓喜するように高く鳴き、風がキッチンやリビングの壁や、入口の扉に付いている窓ガラスを揺らす。窓は揺れることによって、低い音を立てる。

「……………なあ。そろそろ食おうぜ。せつかく焼きたてのパンがあるってのに、冷めちまったら台無しだろ？」

沈黙が嫌いなのか、再び火影が静寂を破る。火影の妙に明るい声を皮切りに、それぞれが「ああ」などの曖昧な言葉を口にし、四本の手がそれぞれ切り分けられたパンに伸び始めた。

パンから手の平に伝わる熱は僅かで、それはほぼ冷めてしまっていた。紅茶も同様に、先ほどまでせわしなく上がっていた白い湯気

も、今ではすっかり臃になってしまっている。

「ハル。そのラズベリージャムを取れ」

「はい、はい。あ、火影。こっちにそのバターを渡してくれないか？」

「はいよ。あ、主。^{あまじ}次、あたいにラズベリージャム渡してくれ」

「いただきます」

ユイは艶やかに光を反射する紅玉のような輝きを帯びたラズベリージャムを食パンに軽くぬる。ハルは白い陶器でできた可愛い花柄のバターキーパーと、バターをぬるためのバターナイフを火影から受け取った。右手にバターナイフ、左手にバケットを持ち、バターキーパーの中にたっぷりと入っている手作りらしい柔らかなバターを、左手に持ったバケットにたっぷりとぬる。火影は食パンを左手に持ったまま、ユイからラズベリージャムが回って来るのを待っている。召喚獣の少女はバケットを手に取ると、何もぬらずにそのままかじりついた。軽やかな音を立てて、バケットが少女の口の中で弾ける。

平穏に見える朝食の風景。皆、明るい表情で食事をしているが、脳裏には禁忌を犯してしまったという問題への不安や焦燥や憂いが浮かび、それを消し去ることはできずにいた。

Episode 1 - 4 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（後書き）

最近の水泳の授業でかなり疲労がたまります…。
毎週テストがあるって…マジアリエナイツ…；
テスト勉強ができません！！！！！！！！

Episode 1 - 5 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動

「ああ……」

軽い音を立てながら、バケツトが一口齧られる。外側はさつくりと固く、内側はふわりと柔らかい。バケツトの香ばしい香りを口の中で楽しみながら、少女はうっとりとするようにまつ毛を伏せる。

「美味しいです。すごく、美味しいです。これは、ユイ様の手作りですか？」

少女は感動のあまりか、瞳を眩しいほどに煌めかせながら左側に座るユイを振り向く。その時ユイは丁度、食パンに齧りつこうとしていたところだったようだ。ラズベリージャムで表面が赤く色づいた食パンが、右手によって口の手前まで持ってこられていた。少女の視線にユイはいったん食パンを下ろし、少女へ向けて小さく頷く。「ああ。早起きして毎朝作っている。これが日課だな。それに、料理は好きだからな。趣味みたいなものだ」

「そうなのですか。バケツト、とても美味しいです。料理が上手なことは、大変羨ましいです」

少女は力強く頷きながら、尊敬の眼差しでユイを見つめる。

「お前サンは料理ができないのかよ？」

食パンいっぱいにはラズベリージャムをごてごてぬっている火影は、訝しげに少女を見る。少女は正面に座る火影を見遣り、少し悲しそうに首を縦に動かす。

「はい。私はまだ、造られて日が浅いので。料理なんてしたことがないんです」

「ああ。そうなのか」

少女の言葉に火影は深く頷く。

召喚獣はもともと、この世で生きていた動物なのだ。その命が消滅し、天へ召す途中で神によって厳選された魂だけが召喚獣となつて新しい器カミンタを与えられ、魂をその器に入れるのである。しかし神と

いう者の存在はなかなか信じられていないもので、詳しいところはよく解明されていない。しかも、召喚獣になるまでの記憶が召喚獣にはないため、詳細は調べることができずにいる。つまり召喚獣を造るとは、魂を器に入れることを言う。

「しかし、本当に美味しいですね。こんなに美味しいものは初めてかもしれません。社交辞令でも御世辞でもなく」

少女はユイのバケットが甚くいた気に入ったようで、鼻歌交じりに食べ進んでいく。

「……………」 「……………」 「……………」 「……………」

見ているだけで空腹を感じ、唾を吞まずにはいられないほど美味しそうににこにこ食事をする少女。その姿を見つめながら、ユイは黙り込み、椅子がないために立ったまま食事をしなければならぬハルはボソリと食事開始のあいさつをし、火影は視線を少女から自分の手の中にある、もはやパンがメインなのかジャムがメインなのか分からなくなっているほどジャムてんこ盛りの、いかにも甘そうな食パンへと視線を移動させる。その視線は、すぐに籠に整理されてきちんと並ぶバケットへと反れ、その二つを交互に見回す。

火影は数分間たつぷりと、二つを見回し続ける。しばらくの後、結局手の中の食パンを自分の前に置かれた皿に置くと、籠に入っているバケットを今まで食パンを持っていた手に取った。食パンよりも固くザラザラとしたバケットの手触りが伝わる。

「ハル」

ふいに少女を見つめ、口を閉じていたユイが声を上げる。その視線は、正面に座る弟へと向けられていた。

「うん？ 何だよ」

ハルはまだ一口もつけていないバケットを右手で宙に持ち上げたまま、自分の名を呼んだ姉に視線を送る。

「お前、食パンは嫌いじゃないよな」

にこりと笑顔で問う姉に対し、冷や汗を流しながら少々嫌な予感を感じつつ、戸惑いがちに頷く。

「そうだけど……。それで？」

「じゃ、ラスベリージャムも大丈夫だな」

「うん。……え？ ちよつと待て！ いや、オレ、ジャムは無理だから！ っていうか、何で食パンが大丈夫「ハル」ラスベリージャムも大丈夫になるんだよッ！？ 関連性ゼロだろ！？」

「うん？ お前は、あたしの作ったラスベリージャムにけちを付けるのか？ そうか、そうか。お前は、あたしの作ったものを食いたくないんだな。よおお く、分かったよ」

ユイは目に不気味な赤い光を宿す勢いでハルを睨みつけた。ハルは蛇に睨まれた蛙の如く、身を縮ませて身動きができなくなってしまう。ユイよりも高い身長を持つハルだが、今や圧倒的にユイの方が大きく見える。

天使の様な綺麗な笑みを浮かべるユイによって、鼻先に食パンを突き付けられているハルは遠慮がちに口を開く。

「い、や……。そういう訳じゃないけど……」

「じゃあ、どういう訳だ？」

「……ぐうっ。分かった、分かりましたよ。食べたらいいんだろ、食べたなら」

ハルはため息をつきながら、バターのぬられたバケットを自分の白い皿の上に載せた。ユイは未だに、ハルの鼻先にラスベリージャムがたっぷりぬられた食パンを突き出している。ハルは二度目のため息をつきながら、甘酸っぱい香りを発散するそれを両手で受け取る。それが、甘かったのだ。

「じゃ。これは頂くからな」

「えっ？」

綺麗なほど真つすぐに伸びる、細長いユイの指は何の躊躇ちゆうちゆうもなく白い皿の上に置かれたバター付きのバケットを掴みとった。

「は？ はあああ ！？ ちよつ、まっ、何、何で取るんだよ！」「うん？」

男勝りのユイはひどく女の子めいた仕草できよとんと首を傾げた。

まるでこのバケツトは自分のものであって、何故そんなことを言われるのか心底分らないと言わんばかりに。

「何でとは何だ。お前のものはあたしのもの。あたしのものはあたしのものだ」

笑顔全開で言ったユイに対し、

「じゃあ、この食パンは姉貴のモンじゃねえか！」

激声を上げながら、右手に持ちかえられている食パンを前へ突き出した。僅かにジャムが宙へ飛ぶ。

「前言撤回。お前のものはあたしのもの、あたしのものはおまえのものだ」

「……何だよその屁理屈」

食パンを下ろしたハルは、ユイから視線を反らして呆れたように呟く。耳ざとく小さな声を聞きつけたユイは、痛いほど強い眼差しで弟を睨みつける。姉には逆らえないハルは、恐れをなしたかのように小さく肩をすくめるだけで、反論などできなかつた。

Episode 1 - 5 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（後書き）

ハルクユイWW

ハルはとってもへタレなのさWW

Episode 1 - 6 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動

「文句はないな。では、これはあたしがいただいでやる」

ユイはにんまり笑うとサディスト宜しく、悔しげに顔を歪めるハルの目の前で大口を開けてバケツトを頬張った。香ばしく焼けたバケツトと、とろけながら良い香りを放つバターがユイの口の中へと消える。ハルは潤んだ瞳で消えゆくバケツトを見送った。

「うん。我ながら美味いな」

などと言いつつ、ユイは嬉しそうにバケツトを食べ進む。

ユイの手からすっかりバケツトが消えてしまうと、ハルは右手に持っている食パンに視線を落とした。白い部分を赤くぬられたそれを恨めしげに見つめ、まるでやけ食いをするかのような勢いでがっがつと食べ始める。

「良い食いつぷりだな」

口元を右手で押さえてニヤリと笑い、ユイは視線をハルに向けたまま紅茶の入ったシンプルな白いカップを持ち上げて口をつけた。ほぼ冷たくなってしまった紅茶を口に含み、その冷たさに小さく顔を歪める。

ハルは自分を見つめる闇の様な漆黒の瞳を見つめながら、そのにくい顔に罵詈雑言の数々を浴びせかけた。ちなみに、心の中で。

「あ」

ふいに声を上げるユイ。白いカップが小さな軽い音を立ててソーサーの上に置かれる。

「言っておくが、もうバケツトは品切れだからな」

食パンを咀嚼していた口が、まるでふいに舌を噛んでしまったかのようにぴたりと止まる。口と手はすっかり固まり、瞳は瞬きさえしない。束の間、ハルは呼吸さえもしていないのではないかと思うほど身動きをしなかった。

ユイは静かにハルを見つめ、火影は自分の食パンが載った皿の淵

にそつと手をそえ、少女は口の周りにバケツトの屑をたくさんつけた顔できよとんと主人を見つめた。

沈黙が続く。徐々にハルの黒い瞳が、下へと移動する。視線の先バケツトを並べていた籠の中。そこにあつたのは、バケツトの小さな欠片だけが虚しさをアピールするかのようにぼつりぼつりと残されていた。

口の中いっぱい詰め込まれていた食パンを嚥下し、胃の中へ流し込む。ひどく緩慢に喉が上下する。ラズベリーの甘酸っぱい味と香りをほのかに感じながら、ハルは視線を上げてバケツトを食べていた一人と二匹をじつと見る。

「ちなみに殆ど食べてしまったのは、この少女だからな。あたしは攻めるなよ」

ユイはあたかも自分は悪くないという風に、召喚獣の少女を指す。「えと……。あの……？」

口元にバケツトの名残をにぎやかにつけている少女はきよとんと目を瞬かせ、自分を指すユイの指を訝しそうに見つめる。

「……どうぞ。お納めください」
火影はと自然な動きで、食パンの載った皿をハルの方向へ滑らせた。

「おう。……つて！ このタイミングでそれはないだろ！！」

「ちえつ。上手くいくと思つたのに」

ハルは火影に突っ込みを入れる。火影は、ラズベリージャムがどろりと盛られた食パンをハルの元に置いたまま、ふつとそつぽを向く。

ハルは口の端をひくひくと釣り上げ、怒りをむき出しにして言葉を乱暴に紡ぐ。

「これはお前が食べる。つていうか！ 何でそんなにみんなバケツトが食べたいんだよ！ こんな、食べ物ごときであーだこーだと」

「食べ物ごときなどと言って、食べ物に馬鹿にするな。あと、一番こだわっているのはお前だろ」

ユイの冷静な反論に、ハルの言葉が詰まる。「そつ、それは……」などと言って言い訳をしようとしているが、どうやら何も言葉が思い浮かばないらしい。結局諦めて、視線を落とすと再度食パンに齧りついた。ジャム特有の口にまとわりつくような甘さが、ハルの気分をさらにどん底へと落としていくようだった。

「あの……」

ふいにハルへ声をかけられる。ハルは視線を上げ、声の主である者を見つめる。

「えつと、バケツトをご主人様は食べたかったですよね？」

声を上げた召喚獣の少女は、純粋な光を宿した黒い瞳でハルを見る。

「……ああ。ああ、ああ、食べたかったさ。君があまりにも美味しそうに食べる姿を見たからな」

ハルは憎々しげに少女を見つめる。少女はそんなハルの憎しみや怒りなど、微塵も感じ取れていないらしい。瞳を猫のように煌めかせたまま、躊躇いなく白く細長い右手の指を形の良い紅色の唇の前に持ってきた。

「吐きましようか？」

神妙な口調で、冗談のようなことを少女はさらりと口にした。ハルは息をのんで僅かに身を引きながら、グロテスクなものでも見るかのような目つきで少女を見る。

「いつ、嫌だ！ じゃなくて、いいです！ 構いません。遠慮しておきます」

「いえ。遠慮なさらずに」

小さな少女の口が開き、その中に指の先が僅かに入る。

「どわー！！ 止める！ いいって！ 遠慮とかじゃなくて！ お願ひします止めてください本当もういいですから！」

「そう、ですか……」

少女は残念そうにまつ毛を伏せて、口からそつと指を離れた。

少女にとっては主人の力になれなかったことが残念であったのだ

が、少女の気落ちした姿を見つめるハルには少女は吐くことができなかつたことを残念がっているように見え、少々この少女を恐ろしく思ってしまったのだった。

Episode 1 - 6 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（後書き）

コメディを書きたいのですが……どうしても私の作品はシリアスに傾いてしまつたんですね、

本当はもう一つの作品である「砂漠の薔薇」だって、シリアスな話にしているつもりはないのですが、結構シリアスな雰囲気があると
いわれます。

コメディって、難しいですorz

しゅんと視線を落とす少女。その姿を目の端で捉えていたユイが、何かに気付いたかのようにふっと視線をハルに向け、口を開いた。

「ああ。そうだ。ところで今日、バケットの材料がなくなった。というか、小麦粉を使いきってしまった」

「はあ！？ えっ、じゃっ、じゃあ、バケットどころか、パンさえも作れないってことか!？」

ハルは大声を上げ、驚きを明らかにした表情でユイを見つめた。

「何当たり前のことを言っているんだ。そうに決まっているだろう。小麦粉以外のものでどうやってパンを作る？」

「や、そうだけどさ……」

ハルは気落ちしたように肩を落とし、もはや小さな屑しか残っていないパンを見つめた。

「このままだと、明日の朝はパンなしだな。今日の三食分くらいは焼いてあるが、この様子だと明日までは持たないな」

「……うん」

ハルは曖昧な返事を返す。

召喚獣の少女は、落ち込んでいる主人を見て悲しげに顔を歪めた。まるで、主人の悲しみは自分の悲しみであるかのように。

長々と兄弟喧嘩のようなことを繰り返す二人に飽きたのだろうか。二人の姿を見ていた火影は、テーブルに頬杖をつくときと大変つまらないうという風に、大きなあくびをした。もしかすると、この二人と暮らしている火影にとってこのような言い争いは、日常なことだからつまらなかったのかもしれないが。どちらにしても、火影の興味は二人の会話にはないということだ。

少女は考えにふけるように唇に右手の人さし指を当ててテーブルをぼんやりと見つめる。

ユイは大げさなため息をこぼし、

「パン、食べたいなあ」

わざとらしい大声で嘆いてみせた。

「そうだな」

半ばあきらめかけ、投げやりに答えを返すハル。

「パンがないということは、バケツトもなしということだな」

「うん。そうだけど。……それで？」

「バケツトなしはいやだなあ。特にお前は今日、バケツトを食べたかったのに食べられなかったじゃないか」

「ああ。え……？」

やや嫌な予感を感じながらも、相槌を打ち続けるハルは僅かに視線を上げる。そして、刹那に上げなければよかったと後悔することになった。

視線の先にいた姉は、ユイは、ハルを見ながらニヤリと意地悪く笑っていたのだ。

ハルが背筋にぞつとする何かを感じたその時。ふいに召喚獣の少女は閃いた。少女の瞳が瞬く星のように輝く。

「そうです！ パンがなければケーキを食べたらいいのです！」

「どこぞの処刑された王妃みたいなこと言うな！ っていうか、小麦粉ないとケーキも作れないから」

顔を素早く少女へ向けたハルが、間髪を入れず突っ込みを入れる。

「むう。そうなのですか……。けれど、昔そんなことを言っている人がいましたよ？ その方は王妃ではありませんでしたが……」

まさかのケーキの原料を知らないという少女は、瞳を瞬時に曇らせる。

「全く。無知なのか、賢いのか……。ああ。その言葉は、どこかの国の王妃が言ったことになってるけど、一説ではその言葉を言ったのは王妃ではなく、ただの貴婦人だったって言われてるな。しかも言ったのはケーキじゃなくて……。って。こんな雑学を披露してどうする！？ とにかく！ この言葉は、パンが買えないならケーキを買って意味だから、作れるとか作れないとか材料がどうとか」

て話とは別なんだよ」

長々と語ったハルは、一気に疲れが身体へ押し寄せて来たかのような表情で、自分のカップへ手を伸ばす。その中に入っていた冷え切った紅茶を口に含み、喉から胃の中へと一気に流し込む。

乱暴にソーサーへカップを置いたハルは、その手で頭を抱え眉をしかめる。

「そうですね……。あ！ それならば、買いに行きましょう！ 材料を今日中に買えばよいのです！ ここは町はずれみたいですけど、歩いて三十分もあれば街には付く距離ではないかと推測します！」

少女の弾んだ声は、

「なかなか冴えているじゃないか」

「うん。そうだけどさ……」

「あー。？ だけど？ だな」

ユイは腕を組んで笑い、ハルは気まずそうに横を向いて視線を床へ落とし、火影は意味深は言葉をはいた。

「何か、問題でも？ 何故かご主人様が、大変嫌がられているように見えるのですが……？」

「そうだよ、その通りさ。オレは絶対に街へは行きたくない」

ハルは顔を引きつらせ、厳しい口調で吐き捨てる。嫌がるハルを無視して、

「行け」

ユイは即答で命令した。これ以上ないほど、大変簡潔に。

「だから、何でオレが行かなきゃいけないんだよ。オレは嫌だつて言ってるだろ。これだけは引き下がれない」

「嫌？ お前、姉に向かって嫌などと言っているのか？ ？」

「オレの人権無視ツ！？」

ユイは悪いことをした子供を叱る親の様な、もしくは自分勝手なガキ大将のような口調で、「嫌」という言葉を強調してハルを攻めた。ハルは突っ込みをいれたものの、姉の態度にたじろく。

「何戯言を言っている？ ハル、これは命令だ。今日中に街へ行って小麦粉を買ってこい」

ユイは上からの態度を崩さぬまま、ハルに言葉を突き刺すように声を発する。

「だって……。だって、オレが街に行ったら……」

「行ったら、何だ？ 世界が破滅するのかわ？」

「や……。そんな神的存在じゃないけどさ、オレ……。そうじゃないけど」

「では、行って来い。今日中に」

ユイの冷酷とも思える言葉に、ハルは顔を思い切り歪めた。

「知ってるだろ、姉貴。オレが街に行ったらどうなるか。世界は破滅しないけど、オレが破滅する恐れがある」

ハルの一転して神妙な口調に、ユイはざりと答える。

「お前が破滅しようと思ったことではない」

「お前それでも姉か！？ オレは本当は姉貴とは血い繋がってないのか！？」

「あたしを？お前？呼ばわりするな！」

「そっちかよッ！！」

二人の言い争いを見つめながら、火影はやれやれとため息をつき、少女は僅かに眉を寄せてきょとんと小首をかしげていた。

そんなに皆、パンが食べたいか！？

私はそんなにも激しいパン議論を求めてはいないぞ！

手が、勝手にタイピングするだけだ

つてな感じで、そろそろ話の展開が望めます(訂正・と思います)；

砂漠の薔薇の方は、なかなか書けないです；

何故！？ 今結構書いて楽しい展開の場面を執筆中なのに！？

月曜日の国語のテストか！？ あれが気がかりなのか！？

あんなもの、諦めちm(殴

国語だけはいいい点数をとりたい甘楽です。

中間は、どうしてあんな点数をとってしまったのだろうか；；

や。全然赤点からは遠いんですが；

Episode 1 - 8 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動(前書き)

だんだんとシリアスになっていきます。

ハルはどうしても街へ行きたくないらしく、ユイはそんなハルをどうしても行かせたいらしい。ユイはどうやらハルの反応を楽しんでいるように見える。

「お前の個人的な苦情が受け入れられると思うか？ そんなわけないだろう。受け入れられるとしても、そんなクソみたいな意見、瞬殺されるにきまつているだろう？」

ユイはハルの意見や個人尊重などといったものは、まるでこの世に存在しないかのような口ぶりで語る。

「うう……。何だよその差別。訴えるぞ」

「訴えられるものなら訴えてみる」

「ああ！ やってやるうじやないか！」

「お前、自分にそんな勇気があると思うか？」

「うう……」

結局姉には頭が上がらないハルは、言葉を喉にひっかける。イスがもともとこの家には三つしかないため、一人立つこととなつていゝるハルの方が断然視線は高いが、ユイの威圧感とは半端ではない。

「……ふふつ。うふふふふつ」

ユイがハルを睨みつける、張りつめた雰囲気満ちた部屋。そこへ、小鳥のように軽やかで鈴が震えるように心地よい笑い声が、突然流れた。はつきり言つて場違いだが、その笑い声は思わず耳を澄まして聴いてしまうような美しい声だった。

三つの視線が一齐に、麗しい笑い声の元へと集まる。笑い声を上げる者、ハルの召喚獣である少女は透き通る明るい闇夜のような蒼い長髪をなびかせながら、肩を震わせて笑い続ける。しばらく笑つた後、やっと皆の視線が自分に注がれていると気付き、ぱつと頬を朱に染めた。

「すつ、すみません。ただ、あまりにお二方の掛け合いが面白かつ

たもので」

「これは見世物じゃない」

むっとして口をへの字に曲げたハルは、大変面白くなさそうな目つきをして少女へ視線を送る。

「はい。分かっております。けれど、とてもテンポが良かったもので。私、初めてご主人様とユイ様を見たとき、てっきりお二方は同棲されている恋人同士なのかと思いました」

「誰がこんな凶暴女と!」「誰がこんなヘタレと!」

二人の息がぴったり合い、同時に双方が視線を激しくぶつけあって火花を散らした。が、結果は瞬時についた。無論、どちらが先に引いたのかは言うまでもない。

まるで漫才をしているかのような二人を見ながら、先ほどまで興味を失っていた火影もぶつと吹き出し、少女は少し嬉しそうに軽く両手の平を合わせて小さな音を立てた。

「こんなにも息がぴったりということは、やはりお二方は真正正銘のご兄弟ですね! 良かったですね、ご主人様。先ほどまで本当に兄弟なのかと疑いになられていましたが、これで本当の兄弟だと判明しましたね!」

「や。アレ冗談だし」

ハルはどこか抜けている少女を遠慮がちに見、少女は何が何やら分からないからとりあえず、といった感じで微笑んでいた。

「では、ヘタレ。お前が本当のあたしの弟だと分かったところだし、姉の命令をさつさと聞け。今すぐに、さつさと街へ行って来い、このバカヘタレ坊主」

にこりと笑ったまま、あまり綺麗でない言葉をはくユイ。はつきり言っとても恐い。

ヘタレもといハルは顔を歪めながらも、「あー」と漏らし、乱暴に黒髪の頭をかいた。

「分かったよ。行くよ。行けばいいんだろッ。どうせオレは年中無休の暇人ですよ」

「おう。なかなか物分かりが良くなつたんじゃないか？ 頼むぞ、このバカヘタレヒマ坊主」

「さつきより悪くなつてる……！」

無邪気な笑みを浮かべるユイだが、それがハルにはどうしても悪魔の笑みにしか見えないのだった。そのうち先が三角の黒い尻尾が生えてきそうである。

額から目の下までにかけて縦棒を引いている主人を見つめながら、少女は遣り切れない気持ちで心を満たしていた。躊躇いがちに瞼を伏せながら、上目遣いに「あの……」と少女は口を開く。

「よければ、私もご主人様とともに街まで行きましようか？」

「えっ？ う……」

少女を振り向いたハルは、その上目遣いな姿に少々目を見開いて頬を染めながらも、慌てながらしかししっかりと首を横に振った。

「なっ……。何故ですかッ？ ご主人様をお守りすることは、召喚獣の決まりですッ」

主人の反応に愕然とした少女は、反射的に問う。少女の戸惑うような瞳と声に、ハルは顔を歪めて再度首を振る。

「そうかもしれない。けど……街だけはやめとけ。それに」

「お前の存在が公になると、随分厄介なことになるからな」

ユイは珍しく神妙な声音と眼差しをして、静かにハルと少女を見すえた。

「小娘とハルは、召喚獣使い取締委員会とりしまりいんかいによってさだめられた、国にも公認されている禁忌を犯した。これは大罪に当たり、召喚したハルは悪くて死刑、良くても無期懲役でブタ箱行きだ。小娘の罪は軽いだろうが、血の契約という固い契りを二人の間で交わしてしまった以上、もはや二人の関係を断ち切る術すべはない。もし、国や委員会や他の召喚獣使いにこのことがバレてしまえば、その時は二人とも、死を覚悟しておけ。特にハルは、な」

ユイの冷たい声と視線に、少女は今にも泣き出しそうな顔で俯く。ハルは気まずそうに視線を下で泳がせ、最終的に自分の足の爪先を

睨むような形となった。

Episode 1 - 9 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動(前書き)

前回言っていないかもしれませんが、「召喚獣使い取締委員会」というのはこの世で言う警察みたいなものです。
そのうち詳しいことや、人物は出していこうと思っております。

静かな空気の中に、ユイの密やかなため息の音がやけに大きく響く。重苦しい静寂の中、ユイはその心の強さを反映しているかのようにはゆるぎない眼差しをため息とともに床へ落としたりはせず、俯く一人と一匹へしつかりと向けていた。

「あたしも、お前にどんな厳しい言葉やいじめるような言葉を浴びせても、結局はお前の、ハルの唯一の肉親であり、姉なのだから心配をしていないわけではない。そこを良く分かっておけ」

ユイは改まって姉らしい言葉をさらりと口にした。が、その頬には僅かに朱が差していた。

ハルはその言葉に驚いて、凝視していた爪先から視線を上げて正面に座る姉へと向き直った。ユイは視線が合ったハルを、むっと不機嫌そうに睨みつける。その顔はまだ赤い。どうやらユイは、照れ隠しをしているようだった。

「……ご主人様。申し訳ございません」

ふいに、蚊の鳴くような細く頼りない声が、二人と一匹の耳に届いた。二人と一匹が、それぞれ視線を同じ方向へ流す。三人が見つめる先にいる者 召喚獣の少女は、ぼろぼろと大粒の涙を瞳からこぼしていた。

漆黒の瞳は頼りなさげに潤み、目じりから溢れだす透明な澄んだ水の玉は頬に尾を引き、顎から少女の膝の上で祈るように組まれた細長い両手の上に落ちる。

ハルは少女の涙を確認した刹那に固まって言葉を失い、ユイは黙ったまま席を立ち、火影は「この状況をどうにかしろ」というような視線をハルへ送っていた。

「なっ、なな泣くなよ。誰も君を攻めているわけじゃないんだ。悪いのは、召喚してしまったオレの方だし……」

「いつ、いえ……。ご主人、様は、何もっ、悪く、な、いんですっ。」

私がつ……私さえつ、ご主人様の元へ、行って、いなければ……」
少女は両手で涙を必死に拭う。が、熱い雫は少女の目から溢れることを止めようとはしない。

「そんなつ。召喚獣は誰の元へ行くのか決められないわけで、君が自らここへ来たわけじゃないんだから、全然悪くないって」

ハルはどうしたら良いのか分からず、言葉を解れさせながら紡ぐ。少女はハルの言葉にもただ首を振るばかりで、呼吸困難のような苦しげな呼吸を続ける。ハルは少女の反応に困ったような顔をして、何と声をかけようか考える。その眉間に縦じわが刻まれ、やや俯きかける。と、ふいに席を立っていたユイが少女の隣に戻って来た。その手には、白い柔らかなタオルが握られている。

「ほら。これで涙を拭け」

ユイは少女にタオルを突き出し、少女は躊躇いがちにそれを両手で受け取った。

「全く。泣いても、問題は解決しない。めそめそと泣くくらいなら、この問題の解決策を考えろ。泣いても喚わめいても、結局現実というものには変わったりしない」

ユイは言葉を紡ぎながら、徐々に双眸を細める。彼女の声音は、己の戒めや過去の後悔を語るかのような大変厳しいものだった。

「は、はい……」

水つばい音を立てながら鼻を吸り、少女は目をタオルで覆った。花のように柔らかな芳香が、タオルから漂う。懸命に涙を止めようと歯を食いしる少女の隣で、ハルはますます顔を俯けようとしていた。顔を歪めて情けない表情になっている弟を見ながら、ユイはむっと口を曲げる。

「ハル」

「え？ ちよつ！」

ユイはハルの顎を右手の親指と人差し指で掴み、力強く顔を上に向かせた。ぱつと、二人の視線が合う。

「俯くな。お前は男であり、この小娘の主人だろ？ 主人が情けな

くてどうする？　いくら小娘が自分が悪いと言おうと、召喚したの
はお前だ。現実から目をそらすな。現実逃避は、目が覚めたときに
もっと現実が嫌になってしまうものだ。これ以上辛い思いをしなく
ないのならば、現実を見る！　前を向け。下ばかり見るな！　男な
ら、もつとしつかりしろ！　昔、お前はあたしに誓ったはずだぞ！
「あつ」

ハルは双眸を大きく開く。まるで遠い過去を見つめているかのよ
うに、その瞳はこの場の景色を見てはいなかった。それでも、その
瞳はユイからそれたりはしなかった。

「……そうだった。オレは、あの日姉貴を守るっていったんだつた
な……」

漆黒の瞳同士がぶつかり、ユイは本当に嬉しそうににっと笑った。
ハルもつられるようにして、不敵とも思える笑みを浮かべた。

「覚えていたな。では、とりあえずさつさと今日中に街へ行け」

「……やっぱりそれかよ」

半分消沈するように、半分明るく楽しそうにハルは言い、その眉
間にしわを寄せながら微笑んだ。ユイは「変な顔だな」とハルをか
らかいながら、ハルの顎から指を外して自分の席へと戻った。

泣き腫らして赤らんだ目をした少女が、その時ふいにタオルを膝
の上まで下げ、身を乗り出してハルを見つめた。

「あの……。やっぱり、私も街へついて、いきたいです。絶対！

正体が露見するようなことは、ないように心がけますから！」

まだ僅かに涙の気配を残している声に、二人と一匹は少女の方を
見る。少女の黒い瞳は、六つの瞳を真摯に受け止め、

「私も、ついて行かせて下さい」

先ほどの言葉を要約し、再度はつきりと思いを伝えた。

冷たく張りつめた、真剣な空気の中。ふとお茶を飲み干した狐の召喚獣が声を上げた。

「ところで。皆、禁忌の問題ばかりに気が取られてるけど、大体お前サンは何の召喚獣なんだ？」

「あぁッ」「そういえば」

ハルはその事をすっかり忘れていたという風に 実際すっかり忘れていたので、素っ頓狂な声を上げた。ユイはきょとんと首をかしげ、両手で頬杖をついた。ストレートの黒い長髪が、女性にしては筋肉質な方の上で躍る。

「あ、はい。言い忘れておりました。ご挨拶が遅れてしまい、申し訳ございません。私」

少女は椅子と床がぶつかる音を立てながら、立ちあがった膝の裏で椅子を後ろへ移動させた。そのまま服の裾を軽く揺らしながら、百八十度回転する。少女の肩に乗っていた蒼い髪が、軽くウェーブしながら柔らかくこぼれた。すらりとした白い少女の手が、緩やかな動きで背中へ回る。そして、

「なっ……っ！」

ハルが大きく目を睜^{みは}り、顔を朱に染める。

少女は、何の躊躇いもなく上の服の裾を捲^{まく}りあげたのだ。

目に眩しい純白の背中が覗き、綺麗なラインを描くくびれが目を引く。女性なら、思わず嫉妬してしまいそうなほど整った体型である。

火影は椅子の上に行儀悪く膝を立て座り、ハルの反応に対して密かな笑い声をもらした。ユイは少女の大胆な行動に対して、僅かに眉をひそめる。瞬きの回数が異常に多くなっているハルは、視線をあちこちに巡らせ、しかし結局吸い寄せられるようにして、少女の白い肌へと向かわせた。

その心には羞恥心という気持ちがないのではないだろうか、と思いたくなるような行動を突如としてとった少女の、中心にすらりと背骨が伸びる丸見えになった背中。そこに？それ？はあった。丁度腰の位置に当たる背に、三十センチ四方ほどの大きさをした漆黒の羽が生えていたのだ。漆黒、といっても、羽は黒一色ではない。深海のような青や神秘的な紫も混ざっている。

羽をもつ少女は肩越しに二人と一匹を振り返り、ふわりと優雅に微笑んだ。

「スフロウテイルアゲハ蝶の召喚獣です」

柔らかな声音で、少女は言葉を噛み締めるように告げた。誰もが魅了されてしまうほど魅力的な少女の微笑を見つめながら、

「アゲハ蝶って、召喚？獣？なのか？」

火影は本当に小さな声で独り言ちた。その言葉は、誰の耳にも届いてはいなかった。

少女の手が服の裾から離れる。薄いヴェールのような服が、少女の白い素肌を覆う。刹那、ハルの口から小さな安堵の息がもれた。

少女は再び身体を百八十度回転させ、すくと素早く腰を下ろした。顎の下に手をつけて少女を見つめているユイが、開きにくそうに口を開ける。

「小娘。召喚獣である証は、それだけだな？」

「はい。そうです」

少女は小さく首を上下に動かす。少女の背中にある羽は服の下に隠れているため、外見で不自然に見える部分はない。目を細めじろじろと上から下まで少女の容貌を見たユイは、確信するように一度頷くと小さな声とともに椅子から立ちあがった。

「あたしの小さくなった服を貸そう。ついてこい。部屋へ行くぞ」

「えっ？ あ、では……」

「街に行く許可をだそう。しかし、くれぐれも、正体がバレるような行動はするな」

ユイはくれぐれもの部分を強調して言い、ユイの言葉に少女はぱ

つと顔に光の花を咲かせた。

「はいっ！　ありがとうございますッ」

少女は素早く頭を下げ、腰を九十度に前方へ折った。

「分かったら、さっさとついてこい」

「はいッ」

ユイは小さく微笑むと、肩越しに少女を手招きした。明るく太陽のように笑う少女は、ユイのもとへと軽い足取りで近づいて行った。

「あ、火影。テーブルを片付けておいてくれ。ハルは、それを手伝え。絶対に！　部屋を覗くなよ。いいな」

「えっ、あ、はっ、はい……」

ハルはユイの迫力に気圧けおされるようにして、身長が十センチ程度になるほど身を縮込ませた。少女はきよとした顔でハルを見つめ、火影は意地悪い目つきでハルを見ながら喉の奥でクツクツと笑いながら声を上げる。

「ま、もうすでにハルはこの娘この真っ裸を見てて乳繰り合ったりしてるわけだし。別にどうってことないような気もするけどね」

「ばっ……！　火影ッ！　それは勘違いだって、何回言えば分かるんだよッ！」

ハルは一瞬にして耳まで真っ赤に染め上げ、火影は面白そうにニタニタと笑う。ユイは火影の冗談や軽口に関わっていられないという風に小さく息をつき、少女は先ほどから小鳥のように首をかしげたままだ。

「あの……」

少女の可愛らしい声は、二人と一匹の視線を一斉に集めた。少女は首を傾げたまま、二人と一匹の視線を集めたまま、

「？　チクリアツタリ？　って、何ですか？」

純粹な光をたたえた瞳で、悪意や邪気の欠片など一切なく真剣に質問した。勿論、質問に返って来た答えは三様の？　沈黙？　のみだった。

ハルは気まずそうに視線を天井へと反らし、ユイは顔をしかめて

口をへの字に曲げ、火影は「どんだけこいつは世間知らずなんだよ」という風に眉根を寄せた。

「……………えっ、と?」

少女は何故皆が黙ってしまったのか本気で分からないらしく、純粹無垢な瞳を数回瞬かせた。

少々下品な言葉を使ってしまって、ごめんなさいOrz
なかなか砂漠の薔薇の方の執筆が進まないことが最近の悩みです；

Episode 1 - 11

召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（前書き）

ごめんなさい。

昨日の夜から親と色々ともめておりまして、イライラで執筆が思うように進みません。

少し質が悪いかもしれませんが、機会のある時に訂正したいと思います。

今日はほんとに許してください。

「……とにかく。着替えに行くぞ。火影。つまらないことを言わず、さっさと片付ける。ハル。片付けながら、この小娘の名前を考えておけ」

気まずい沈黙を断ち切った、ユイのひどく冷静な声。その声を皮切りに、再び皆が口を開く。

「了解。こっちはあたいに任せろ」
「分かった」

火影は椅子から腰を上げ、身につけているシャツの袖を捲り上げた。ハルはちらりと視線を上げ、少女を見る。刹那に二人の視線が触れ合い、慌ててハルは視線を落とす。

「行くぞ」
「あつ、はい」

ユイは少女の服の裾を引っ張り、玄関の反対側の壁の左隅にある階段へと続く廊下へ半ば強引に連れて行った。少女は廊下の向こうへ消えるまで、ずっとハルを見つめていた。

やがて奥まった廊下の壁に遮られて、ハルの姿が見えなくなる。少女はそれを確認すると、

「あの、ユイ様」
階段を登りかけていたユイを、小声でそつと呼びとめた。

「うん？ 何だ？」
ユイは耳ざとくその声を聞きつけ、中途半端な体勢で一旦足を止めた。

少女は僅かに視線の位置が高くなったユイを見上げ、すつと静かに深く息を吸った。

「実は、お話したいことがありまして……。ご主人様にはまだ、聞かれたくない話なのです」

x

x

x

リビングとキッチンの間を行き来するせわしない足音が響く。火影は籠やらジャムの瓶やらを運びながら、先ほどまで自分が座っていた椅子にぼんやりと座るハルへちらりと視線を送った。

「ハル。少しはあたいを手伝えよ。ぼうつとするな。考え事なら、手を動かしながらすることだね」

「うん。そうだな」

「大体、主様にも言われただろ。片付けろって」

「うん。そうだな」

「名前を考えることぐらい、手え動かしながらでもできるぞ」

「うん。そうだな」

「……話、聞いてないだろ」

「うん。そうだな」

火影の額に、血管が浮き出る。

「ハル！ いい加減にしゃがれッ！！ てめ、何あたいにばかり片付け任せてんだよッ！ ちょっとは働けッ！ この役立たずのヘタレカス！」

つかつかと歩み寄って来た火影の剣幕に、やっと我に返ったハルはふつと焦点を結ぶ。その瞳が頬を引きつらせている火影を捉え、

「あ、何？ 火影」

間の抜けた声で、憤りに顔を歪めている火影に訊ねた。火影はやつとの思いで憤りを抑えつけ、不自然に静かな声で言葉を噛み締めるように紡ぐ。

「だから、少しは、あたいを、手伝え、つつつてんだよ！」

「え？ ああ」

ハルは、テーブルの上に並ぶ皿やカップへと視線を移す。テーブルの上を彩っていたジャムの瓶はほぼすべて片付けられており、残

るは皿やスプーンなどのみとなっていた。

「早くしろ。残りがお前サンが片付ける」

「はい、はい」

ハルは小さなため息をつきながら、椅子から立ち上がる。ふらりと身体を揺らし、手を前に出して食器を掴む。

「ところで、名前は決めたのか？」

「え？」

「名前だよ。な・ま・え。あの召喚獣の少女の」

「ああ……」

ハルは手を止め、ふつと視線を遠くへなげる。

「……そうだな。夢幻むげんにしようかな、と思ってるところだ」

「夢幻むげんね……。夢幻むげんってあの儂はかないってことの夢幻むげんだろ？」

「ああ。そうだ」

「何でまた、そんな名前を？」

火影の訝しげな問いに、ハルは遠くを見すえたまま頷く。

「彼女には、何か儂はかないイメージがあるから、かな。初めて見た時も透き通ってるほど……肌が白いつて思ったし」

ハルの脳内にあの記憶の片鱗が浮かび、慌ててその思いをかき消した。

火影は鼻で小さく笑い、むっとした顔のハルに睨まれておどけたように首をすくめた。ハルはむくれた顔のまま視線を火影から外し、言葉を続ける。

「それに、彼女の姿自体、幻みたいに繊細で儂はかなく見える、気がするんだ。少しでも強く振れば、一瞬でかき消えてしまいそう……。それに、声も透き通ってるし。だから、この名前がぴったりかなって」

「お前サンにしてはいい考えなんじゃないか。あたいはいいと思うよ、その名前。ま、あの娘が気に入るかどうかだけだな」

火影は小さく鼻を鳴らしながらも、ハルの提案した名前に否定を述べはしなかった。

「そうか」

ハルは短く答えると、再度手を動かし始めた。

Episode 1 - 12 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動

「けど……。どうして、召喚を間違えたんだろ……」

テーブルの上を片付け終え、椅子に座ってテーブルに突っ伏しているハルが、ふいに言葉をもらす。キッチンで食器を洗う火影は、ハルへと視線を上げた。

「何だ？」

「いや、だから、何で召喚を間違えたのかわかって……。オレ、本当は男の鴉カラスの召喚獣を召喚するつもりだったんだ」

ハルの言葉に、火影は白い泡に包まれた手の動きを一旦止め、しばし物思いにふけるように視線を宙に彷徨わせる。が、すぐにその視線は食器を洗う自分の手へと落とされた。

「そりゃあ、手順が間違ってたんじゃないかねえのか？」

火影のあっさりとした声に、ハルは神妙な顔をして首を横に振る。「いや。魔法陣は完璧だった。召喚の詠唱だって一語一句間違っていないはずだし……」

ハルが否定を述べ終えるとともに、火影は食器を洗い終えた。手にまとわりついた泡を水道の水で洗い流し、タオルで丁寧に手の水を拭く。

「別に、今更何を言っただって無駄だろ。言うことで問題が解決するわけじゃねえんだから。召喚したからには、主としてしっかりしろよ、ヘタレ」

「だから。いつまでもヘタレヘタレ　っでッ!!」

頭を振り上げるように、ハルがテーブルに伏せていた頭を勢いよく上げた。刹那、その後頭部に手刀を叩きつけられたような鈍い痛みが走る。

「いつでで……」

余りの痛みに悶絶するハルは、視線だけを後ろへ投げた。そこには、ハルと同じく痛みに呻く火影が立っていた。

「何すんだよツ。火影」

「ぐうっ……。それはこっちの台詞だっつーの……」

後頭部を抑えるハルの頭上では、火影が鼻を押さえていた。火影の痛々しい声が、ハルの上から降って来る。

「つーか、何してたんだよ、火影は」

「いや、お前サンの顔を覗いてやろうと近づいたら、いきなりお前サンが顔を上げるもんだから……。っ痛……」

火影の瞳は痛みのみならず、僅かに潤んでいた。ハルは後頭部を手で擦りながら、今回は恐る恐る頭を上げる。火影は赤くなった鼻の周りを覆いながら、鋭い目つきでハルを睨みつける。

「こっ、恐いですって。火影さん」

「悪かったな、恐くて。ったく。覗きこんでたあたいにも非はあるけど……」

「ですよね」

「そこは強く否定しろッ！」

噛みつくような勢いで火影はハルへ言い、ハルは小さく身体を震わせた。

「全く。痛^{いて}えんだよ。っていうか、主様とあの娘遅くないか？」

「あ、そういえば。何かあったのかな……？」

ハルは僅かに腰を浮かせ、階段へ続く廊下の方へ首を伸ばす。無論、そこに見えたのは薄暗がり沈む廊下のみ。

「あたい見てくる。お前サンはここにいろ。あ、別にお前サンはあの娘の生着替えシーンを見たってどうってことないか」

「だから！ いつまでんなことを言っつもりだッ！ あれはたまたまだって！」

「へい、へい」

火影は小さく笑うと足を廊下へと一歩踏み出し、

「っっ……！」

眉根を寄せ、足をふらつかせた。

火影の身体が不安定によるめき、ぐらりと斜めに傾ぐ。

「危なっ！」

火影の身体が揺れるのを見た瞬間、ハルは後頭部から手を離し、目を見開いて両手を火影へと伸ばしていた。ハルの足元で、椅子がけたたましい音を立てながら床へと派手に倒れる。ハルの真つすぐに伸ばされた手が火影の身体をしっかりと捉えたが、

「重っ！」

その一言とともに、ハルもろとも火影は床に倒れた。

「っ痛……」^{いた}「ったた」

火影は顔を歪め、火影の上に倒れ込んだハルは顔をしかめながらも、すぐさま身体を起こした。両手を火影の両脇につけ、その二つを支えに上半身を持ち上げる。

「って、大丈夫かッ？ 火影、どうした？」

ハルは、顔を歪めて目を閉じている火影を曇った瞳で見つめる。

「お前サンに心配されるほど柔^{やわ}なあたじゃない。ちよつと眩暈がしただけだ」

火影の亜麻色の髪が床に散らばる。火影は閉じていた瞼を上げ、金の瞳を光にさらす。ぼうつとした焦点を結ばない瞳のまま火影は言葉を発するために口を開き、

「っ！」

そのまま言葉を口にはできず、息を止めて目を瞠った。太陽のような黄金の瞳が、一瞬にして凍りつく。

身体に電流が流れたかのような、こわばった表情をしたまま火影は何も言わない。その肩は小刻みに震え、口元は空気を求めて喘ぐように薄く開かれていた。

Episode 1 - 13

召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（前書き）

皆さま、大変お待たせして申し訳ありませんでした。

おかげでテスト勉強にゆつくりと専念することができました。ありがとうございます。

さてお久しぶりの投稿です。

久しぶりの執筆でしたので、二人称や口調に多少のブレが生じているかもしれませんが。目だった間違いがある場合は、御手数かもしれませんが感想にコメントをいただけると大変うれしいです。

束の間の沈黙が流れる。火影は顔面蒼白で唇を小刻みに震わせるまま何も言葉を発しはせず、ハルはふいに固まってしまった火影を心配げに見つめるばかり。

やがて沈黙に耐えかねたのか、ハルが不安げに揺らぐ声音でゆるりと言葉を吐き出す。

「……えと、火影？ だ」

「大丈夫か??と続けようとしたハルの言葉は、

「さっそく不倫か。お前もふしだらな男だな」

女にしては低い声によつて、一瞬で遮られてしまった。大きく目を睨ったハルは床から両手を浮かせ、はつと声の方向 後方にある階段へ続く廊下の入り口を振り返った。案の定、

「なっ……！ 不倫って何だよ！ っていうか、それは誤解だッ！」
そこには、廊下の壁にもたれるようにして片腕をつけているユイが立っていた。

姉の姿を黒い瞳で認め反論の言葉を吐き出すと同時に、ハルは炎を灯したように顔はおるか首や耳まで赤く染めた。壁にもたれて立つユイは、ハルの反応にニヤリと口の両端を釣り上げて意地悪く笑う。

「じゃあ何だ？ お前は召喚獣を押し倒す趣味でもあるのか？」

「そ、そんな悪趣味なわけないだろっ」

ハルはどぎまぎと不自然な動きで床に立ち、身体を火影から離す。火影は未だに放心しているかのような表情で、ハルの顔があった場所の虚空を呆然と見つめている。虚ろな金色の瞳には、視線の先にある天井も、心配げにしかし遠慮がちに見つめるハルの姿も、眉をひそめて立つユイの姿も一切映ってはいない。その瞳が見つめるのは、ここではないどこか遠くの景色と人と

「火影。いつまで床に寝るつもりだ。そんなに前が床を愛してい

たなんて情報は、今まで一度も聞いたこともないぞ」

冷淡で無情とも思える冷静なユイの声音に、一瞬で火影の焦点が結ばれる。まるで、ふっと息を吹き返したかのように火影は我に返り、もう震えてはいない僅かに開いた口で酸素を身体に取り込んだ。目を一度瞬かせ、まるで何もなかったかのようにひどく冷静な態度で上半身をむくりと起こす。蒼白だった頬は徐々に鮮やかな赤みを帯び始める。天から太陽を切り取り、その輝きを目に宿したかのような美しい瞳は鮮明にこの場の景色を、人々を映し出す。

「あ……。火影、大丈夫、なのか？」

ハルは起き上った火影に対して遠慮がちな声で呟く。上半身を起こした体勢のまま、火影は不貞腐ふてくされたような仏頂面で小さく首を縦に動かした。それを認めたハルは火影の表情が気になったものの安堵したように、ほっと胸をなでおろした。

火影は一度瞼を閉ざすと、密やかにため息をつく。

「あたいのことは心配するな。大きなお世話だ」

ため息交じりの言葉を吐くと、火影は両の手の平を身体より後ろの床に付けた。手の平に力を込め、足の関節を曲げる。身体を多少不安定に左右へ揺らしながらも、しっかりと床に足をつけて立ちあがる。

「確かに、オレよりも丈夫な火影を心配するなんてただの杞憂かもしれないけど、やっぱり心配だしさ。召喚獣だって完璧な生き物じゃないんだから、傷ついたり身体が弱ったり病気になったり 寿命はないとはいえ大きな外傷を負えば死んだりするし。それに火影の様子、ありえないくらいヤバかったし」

神妙なハルの言葉を受け流すかのように、火影は「はい、はい」と手の平を軽く振る。

「もういい。はつきり言って、そんなに心配されるとウザい」

「えっ、あ、ウザい……」

ハルは深く心臓に矢を突き立てられたかのように、重たい表情で呟く。ばっさりと言い捨てられ深く落傷ついたので、ハルは顔に暗

い影を落とす。ユイの立つ方向へと歩み出そうとしていた火影は、ふと何かを思い出したように身体の動きを止め「それから」と付け加えた。

「倒れる前、お前さんあたいのことを？重っ？って言っただろ？あれ、メチャクチャ失礼だから」

火影は釘を刺すようにして肩越しにハルを睨み、再び歩みを進めた。ハルの瞳に金色の瞳が鮮烈な印象として残り、瞼の裏でチカリと瞬く。

「おい。まだ片付けは終わってないぞ」

ユイは自分の方へと歩んできた火影へ咎めるような口調で言ったが、

「悪い。気分悪いから、ちょっと休ませてくれ」

火影の言葉によって一蹴されてしまった。やや不満そうな表情を見せたユイだったが、「許してくれ」と真摯に頼む火影の表情を見て、何かをさとしたような驚きに似た表情を映し出した。しかし彼女は普段からポーカーフェイスのため、その表情変化は瞼を数ミリ大きく開けただけのものであったのだが。

「……まあ、いい。では、お前は自室で休んでいる」

ユイの言葉に、火影の身体からふっと力が抜ける。

「ありがとう」

火影は安堵半分疲れ半分の引きつった微笑を浮かべ、ユイに軽く礼をする。返答の代わりにユイは廊下の狭い入口の脇により、火影が通れるほどの道を開けた。火影はユイの脇を通り、息苦しいほどに狭い廊下へと入る。とすぐ正面に、火影の行く手を阻むようにして一人の少女 アゲ八蝶の召喚獣が立っていた。先ほどとは全く違う服装で。

「おう。その服、似合ってるぜ」

火影は一瞬驚いたように双眸の瞼を軽く上げた後、ほの明るい炎を思わせる柔らかな笑みを浮かべた。僅かに緊張した面持ちで火影の正面に立つ少女は、はにかんだ笑みを浮かべる。

「ありがとうございます。あの、えっと、先ほどのからの話を聞くところによると、お身体の具合がよろしくないようですが……。大丈夫ですか？」

はにかんだ表情から労わるような表情へと顔を一変させた少女は、まるで自分の身体の一部が痛むかのように小さく眉をしかめた。

少女の言葉に対し、火影は意外にも余裕を見せてニタリと笑う。

「何だ、そのことか。あたいは平気だ。それよりも、お前さんが早くその姿を主人に見せてやりな。鼻血出すぞ、ハルのやつ」

悪戯っぽく笑いながら、火影は少女の脇をすり抜けて階段を登って行ってしまった。少女は肩越しに火影を見つめる。やがて楽しみにゆれていた狐の尻尾の先さえも上へと消えてしまい、そこでやっと少女は正面へ視線を移した。前へと歩み出そうと足を踏み出しかけた刹那 上の階で、何か物が倒れるような鈍い音と、布の擦れるかすかな音がした。

「え？」

少女は前へ出しかけた足をふっと止め、肩越しに再度階段を振り返った。が、そこには誰もおらず、火影が消えてしまったときのままの状態の階段が静かに広がるのみ。

「空耳、でしょうか？」

少女は納得のできないような顔で首を傾げながらも、再度正面を向いた。

「ほら、何をしている。早くこちらへ来い」

後方でもたもたとしている少女に対し、ユイは怒っている風もなく冷静に声をかける。リビングへと促す言葉に少女は慌ててそちらへ向かう。白いワンピースの裾が、少女の動きを追うようにしてひるがえる。

「お待たせいたしました」

日焼けなどという言葉は知らないとはかりの白い足が、リビングのフローリングへとつけられた。と同時に、綺麗な弧を描くようにしてスカートの裾が柔らかく広がる。

朱に色づいた頬。両端へ自然に広がる薔薇色の口元。白雪しろゆめのような純白の肌。明るい陽光に照らされて澄み渡る海のような色をした緩く波打つ髪は、水色のリボンでツインテールに結びあげられている。服の襟にも同じ水色のリボンが結ばれており、胸元でそれは軽やかに躍る。少女の大きな胸と美しい線を描くくびれを強調するような身体にびたりと合う白いワンピースは、裾にフリルがあしらわれている。胸元はざっくりとあいており、そこにはクロスするように黒いヒモが通されていた。さらに白いワンピースの下に質素な黒いワンピースを着ているらしく、胸元とワンピースの裾から僅かに黒が覗いている。腰の後ろについているはずのアゲハ蝶の羽はどうやら服の下に収められているらしく、鮮やかな黒や紫や蒼の影は全く見えない。

まさに美少女と呼ぶにふさわしいその姿を、呆気にとられた表情で見つめるハル。その口は僅かに開かれているが、あまりの少女の

美しさに言葉を失ってしまった。

「あの……。似合っていますでしょうか、ご主人様」

少女は小鳥のように小さく首を傾げ、自然な笑みでハルを見つめる。が、絶句しているハルが言葉を紡ぐことはない。

「……ご主人様？」

少女は主人の反応があまりにもないため、もしかすると服が似合っていないのではと不安になり、笑みを消し去ってしまった。

口を小さく開け呆然と少女を見つめていたハルは少女の表情が崩れたことに気がつき、はっと我に返った。

「そのっ……。すごく、似合ってる」

ハルの言葉に少女はぱっと顔に光を灯し、向日葵のような明るい笑みを浮かべた。

「本当ですか！ それは良かったです。ありがとうございます」

男性を瞬殺してしまいそんな少女の笑みに、ハルは目を白黒させて視線を彷徨わせる。

二人の姿はまるで、付き合いたての初々しい恋人同士のようにであった。

「ゴツホンッ！」

淡く桃色に色づいた雰囲気を一瞬にして壊したのは、わざとらしいユイの大きな咳だった。その咳に、ハルははっと表情を引き締め、背筋を伸ばす。ハルの向かいで微笑んでいた少女は、微笑みを消すと微かに首を傾げる。

「ところで、ハル。もうこの娘の名前は決めたのか？」

話をそらすような、唐突なユイの問いかけ。ハルは一度瞬きをすると、小さく頷いた。

「あっ、ああ。もちろんだ」

その頬はまだ僅かに赤らんでいたが、先ほどとは違い神妙な面持ちをしていた。

「ほう。で、その名は？」

ユイは意外だという風に目を数ミリ見開く。少女は瞬きの回数を増やし、口元を小さく綻ばせて自分の主人を見つめた。

ハルは少女とユイの視線を交互に受け止めた後、仰々しいほど重々しく口を開いた。

「儂いって意味を持つ、？夢幻？だ」

「夢幻……。名の由来は？」

ユイの問いかけに、ハルは視線をユイに向けて説明する。

「何か、この子は儂いイメージがあるっていうか。すぐに壊れてしまいそうな印象を受けたから、夢幻にしたんだ」

「……ほう。お前にしては、なかなか良い名じゃないか」

ユイは珍しく感心したという風に、大きく頷いた。姉の首を動きと言葉を聞いたハルは、ほっと胸をなでおろすかのように小さく息をつく。

「それで。娘。お前はこの名に納得するか？」

ユイは視線をすぐさまアゲハ蝶の少女へと向け、静かに問う。

二対の黒瞳こくどうに見つめられる中、少女は静かに言葉を紡ぐ。

「私は はい。とても、気に入りました。とても綺麗な響きだと思います。ご主人様が付けてくださった名前です。よろこんで命名されましょう」

少女は 夢幻は、笑顔の花を開きハルを見つめた。ハルは夢幻の可憐な笑みに戸惑いながらも、首だけで小さく頷いた。

「そう、か。気に入ってくれたなら良かった」

ぎこちないが魅力を感じる微笑みを浮かべ、ハルは夢幻を見つめる。こちらもつられて笑みを浮かべてしまうような素敵な笑みに、夢幻は徐々に瞼を大きく開く。驚きと幸福感を噛み締めているかのような表情の夢幻は、柔らかい笑みをその可愛らしい顔に再び浮かべた。今度は、僅かに頬を赤く染めて。

「はいっ。では、私の名は今日から？夢幻？です」

心の底から嬉しさが溢れだしていると言わんばかりの表情で、夢幻は声音を高くした。

和やかな雰囲気の中。嬉々として笑みを浮かべる夢幻を横目に、蚊帳の外状態になってしまっていたユイは、意味深な笑みを浮かべながら夢幻の横顔を見つめる。

「ごほん。なかなか良い雰囲気の中失礼する。残りの片付けはあたしがするから、お前らはそろそろ買い物に行け」

「あ。……うわあああ！ そうだったあああ！」

ユイの言葉によって、ハルは天国から一気に地獄へと真つ逆さまに落とされたような気分になるのだった。

Episode 1 - 15 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動（後書き）

短くてごめんなさい；

ここじゃなきや切れが悪いんです；

Episode 1 - 16 召喚獣の召喚獣による召喚獣の為の大騒動(前書き)

長らくサボってすいません；

素晴らしいきたくさんのアニメに触発され、久しぶりの投稿です！

華々しい喧騒に溢れる街。

白い石畳が長く伸びる大通りの道際には、レンガ造りという統一性意外はすべてまちまちの形や色をした店や家がせわしなく建ち並び。店からは、客を呼ぶ中年女性の野太く快活な声が賑やかに響き、飲食店からは食欲をそそるようなよい香りが漂い、その香りは空腹を抱えた者たちの鼻孔をくすぐり、胃を刺激する。

「すごい。すごい、です。すごいです、すごいです、すごいですっ！」

発光するかのよう煌びやかな街に立つ少女は、歓喜するような大声を上げた。黒曜石のような漆黒の瞳は無邪気に遊ぶ子供のように煌めき、興奮により白い頬は紅潮している。

「……そんなに、すごいか？」

大げさと言っていいほどのはしゃぎようを見せる夢幻に、ハルは顔をしかめて呆れた。

街の様子に見入っていた夢幻は、ハルの言葉を聞きつけるや否や、目にもとまらぬ速さで己の主人を振り返った。

「はいッ。とっても、とってもすごいです。驚きです！こんなにたくさんの方がいるところは、初めてです」

よほど嬉しいらしく、その姿は自分の好きなものについて熱く語る者のようだった。

「ふーん」

夢幻の姿を呆れながらも珍しそうに見つめつつ、ハルはさして興味もなさそうに返事をした。その顔は、何故か浮かない。反対に夢幻の顔は笑顔全開である。その表情のまま、少女は口を開く。

「こんなにも嬉しいと歌って踊りだしたくなります！ ご主人様も一緒にどうですか」

「全力で拒否するッ！ っていうか、公衆の面前で急に躍ったり歌

つたりしないでくれよ。妖しいと思われるから」

ハルの必死な全力否定に対し、夢幻は「え？」と声をもらすと、きよとんと首をかしげた。

「そうなのですか？」

「いや。普通に考えてそうだろ」

ハルの冷静な突っ込みに対し、夢幻は納得のいかないような顔で呻くような声を出すと、考え込むように黙ってしまった。

この非常識にもほどがある少女を恐ろしく思いながらも、常識のある自分が何とかして引っ張っていこうと決意したハルは、空咳を一つする。

「とにかく。さっさと買い物を買ませよう。オレ、早く帰りたいんだけど」

ハルの言葉に対し、夢幻は一瞬にして顔を上げ、重たく暗い雰囲気醸し出しながら涙を流す直前のように俯いた。

「そう、ですか……」

喜怒哀楽の激しい少女に対し、ハルはぎょっと目を見開き少女から一歩後ずさる。

「なっ、何で、いきなりそんな顔すんだよ」

どぎまぎと問いかけるハル。その視線の先で目を伏せている少女は、俯いた顔を上げぬままま悲しげな笑顔を貼り付けて首を小さく横に振った。そして、

「……いえ。いいんです。ご主人様がそう思うのであ」

「キャ　！　ハル様よ！」

否定の言葉を述べる最中、その？奇襲？はやって来た。

「きっ、来た！」

ハルはおぞましい物でも見るかのように顔を引きつらせ、さらに数歩後ずさる。

「　と、え……？」

言葉を中断せざるを得なかった夢幻は、顔を上げると不可思議そうに目を瞬かせた。現在の状態が把握できていない彼女は、疑問に

顔を歪めたままその奇襲を耳と目で知ることとなる。

始まりは、甲高い少女らの黄色い声だった。続いて、激しく素早い足音。それらを聞きつけた道行く人々は、ハルの姿を横目で確認すると慣れた動きで道の端へと寄った。広い道路の中、そうしてハルと夢幻だけが取り残される形となった。

様々な場所から上がる姦しい音に続き、波のように少女の集団がハルと夢幻へ襲いかかる。

世界滅亡を目の当たりにしているかのような表情のハルと、疑問で顔を歪めたままの夢幻は、少女たちとたくさん言葉という怒涛の中へと呑みこまれる。

「ハル様！」「お久しぶりです！」「今日はどちらへ？」「ハル様ー！ 寂しかったですー！」「私も、お供させてください！」「まさか……私に会いに来てくださったのですかっ？」「三十七日と三時間二十四分五十一秒ぶりですわ！」「だめっ！ 感動で、目から汗がっ……！」「もつと近くに行かせてー！」

啞然とし、波の中に突っ立っている夢幻。ハルは言葉を発せないままに波に身を任せるしかなかった。と、その時。

「ちよつと、ジャマツ！」

ハルしか眼中にない一人の少女によつて、棒立ちになっている夢幻が地面へ突き飛ばされた。固い石畳の地面へ尻もちをついた夢幻は、一瞬にして少女の中へと消える。

「あつ！ ちよつ、大丈夫！？」

夢幻の姿を目敏く見つけたハルは、焦りつつも少女らを掻きわけて前進し、顔を歪めて腰を擦っている夢幻の元へ歩み寄った。地面へ視線を落としている夢幻はハルの存在に気がつかない。ハルは少女たちの視線が注がれていることも気にせぬまま、彼女の目の前へ女性のように細い手を差し出した。それに気付いた夢幻はやつと顔を上げ、自分の主人の心配げな表情を捉える。

「立てる？」

「あつ。はい。大丈夫です」

夢幻は、人いきれのせいでも興奮のせいでも街の素晴らしさに対する喜びのせいでもなく、顔を真っ赤に染めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7320k/>

すわろっている

2010年10月8日11時39分発行